審査員講評

野見山 暁治
（のみやま・ぎょうじ）

東京都在住の画家。
安井賞や毎日芸術賞など数々の受賞歴を持つ。2000年には文化功労者に選ばれた。

再開の「風の芸術展」

「風の芸術展」が華々しく九州南端の枕崎で開かれたのは、今から21年前のことになる。華々しくと、あえて形容したのは不安を抱えながら出発したこの展覧会が、予想だにしなかった画壇の中堅作家たちが数多く応募してきたことだ。

順調だったこの展覧会は７回目をもって終わりを告げた。経済的な負担が大きかったのかもしれないが、これは審査する私たちにも、若い応募者たちにとっても、かなりの打撃を受けた。

それから数年たった今回、よくぞ再開に踏み切ったものだと、私は拍手を送りたい。初めての船出よりも、一旦中断された意志が再び燃えあがるには大変な勇気と労力がかかる。

応募作品の中には、かなり見馴れた、そうして水準以上の作品が交ざっていた。当然それらの作品は賞の対象になる。嬉しいことではあるが、あまりにも以前の作風通りであるのが気にかかる。久し振りの再開、もう少し変容してててもいいのではないか。

今回はボランティアの方たちの協力が、大変に嬉しかった。市民の側からのこうした暖かい手は、どんな小さい催しも、やがて大きな力になる。文化運動とはこうした方々の理解と善意から生まれてくるものだ。

林 紀一郎
（はやし・きいちろう）

静岡県在住の美術評論家。新潟市美術館館長や池田20世紀美術館館長などを歴任。NHK教育テレビ「日曜美術館」の出演など。

作品総評

今日の日本の社会的、経済的局相の影響下、依然として美術界は低迷現象を示しているが、その中で、全国各地から、九州南端の枕崎のコンクールにこれだけの応募作品があったことを好結果として率直に受けとめたい。

平面部門だが、468点のうち入選作はわずか45点。入選率10％。これは厳選というよりも“超”厳選という他ない。入選させる喜びは失せ、落選させた無念さと出品作家への申し訳なさだけが募るのだった。なにしろ、全国公募団体展や有名なコンクールなどで活躍している作家たちの出品作さえ“あれよあれよ”といううちに選外の部屋へと運ばれていく有様なのだ。「風の芸術展」で入選を果たすということは大変なことなのである。

特筆すべきは、今回、海外のベルギーからの応募があったことだ。ただし、出品作がおしなべて織物を支持体にした絵画であったのが印象的だった。装飾と象徴の混和がみてとれたが、その中で表現主義的な抽象作品が一点、入選作に選ばれたのは幸いというべきであろう。

大賞は「風の芸術展」の過去の受賞作の造形表現とはかなり異色の、一種の奇想体を示しており、寓意（ぐうい）と象徴性をはらむ形態と繊細巧緻（せんさいこうち）なマティエールによる造形が印象に残った。

金澤 毅
（かなざわ・たけし）

神奈川県在住の美術評論家。元・原美術館副館長。現在は京都にある成安造形大学で名誉教授を務める。

新たな風を呼び起こした「風展」

８年ぶりの「風の芸術展」の復活を喜びながら枕崎を訪れた私の目に、かって見慣れた南国の田園風景が飛び込んできた。２年毎にこの地で行なわれていた現代美術の祭典は回を重ねるにつれて知名度が上がり、辺境の地にありながらも、その重要性は日本の美術界に確実に浸透していった。

今回の応募者の年齢層を見て気付くことは、60代、70代の作家がこれまでになく多く、全体に高年齢化している点である。この理由は不明であるが、かっての出品者が８年という時間を経て再度応募したか、あるいはキャリアを積んだ作家がチャレンジ精神を燃やして応募してきたのではないかと推測したが、こうしたことが反映されて入賞した10名のみを見ても、その平均年齢は52歳となっている。これまで現代美術系の公募展に応募してくる作家たちは、大体が20代から30代が中心であるが、今回は状況が大きく変化したことに気付いた。

芸術は社会を映す鏡のようなものである。今回初めて散見された外国からの応募者は、今後更なる変化をこの企画にもたらすに違いない。国際性を持ち始めた「風の芸術展」の将来が楽しみである。

毎週日曜日は風のコンサート　南冥館で午後２時～　入場無料

開催日	タイトル	出 演 者
８月８日	フルートとハープの調べ	関めぐみ（フルート）、野元奈帆子（ハープ）
15日	ふわり にっこり フルートと	池田博幸（フルート）、中島俊子（ピアノ）、池田泰子（アルト）、上村久美子（ソプラノ）
22日	ピアノ演奏会	大西文音（ピアノ）
29日	海のハーモニー	マリンコーラス
９月５日	アコースティック・スカライブ	ＢＯＮ　ＤＸ
12日	レクチャー・クラシックコンサート	白澤玲子（ソプラノ）、外岡紀子（フルート）、ボウジンゾン（テノール）、柳寿枝（ピアノ）
19日	ART STREET ～風からの伝言～	ＲＥＮＳ
26日	風によせて	堀之内孝子（ソプラノ）、寺薗玲子（ピアノ）

国内外から応募総数５４１点
大賞決まる

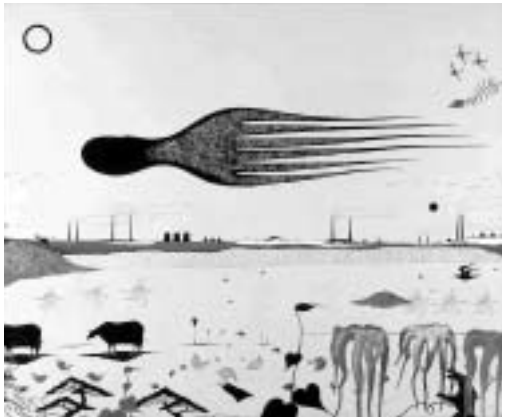
８月１日から南冥館で開催している「風の芸術展」。展覧会に先立ち、入賞・入選を決める審査会が７月６・７日の２日間、南冥館で行われました。３名の審査員による審査の結果、大賞は三村亘さん（福岡県）の平面作品「Breeding10-1」が受賞しました。

コンクール形式としては８年ぶりとなった今回、国内外から５４１点の応募があり、平面作品45点、立体作品31点の計76点が入賞・入選。日本の画壇の第一線で活躍している作家の応募も多く、レベルの高い作品が集まりました。

今や日本で１、２を争うともいわれるコンクール「風の芸術展」。会場で観るとその迫力は圧巻です。みなさんもこの感動を南冥館で味わってください。

◎南冥館　TEL72-9998

大賞・準大賞作品



縦162㌢×横194㌢

大賞（平面）
＜Breeding10-1＞
三村 亘（福岡県）

【受賞者の声】
大賞をいただき大変嬉しく思っています。作家活動の今後の力になります。海・火山などエネルギーみなぎる土地というイメージがある鹿児島。Breeding10-1は生命体がテーマの作品です。ぜひ会場でご覧になってください。

高さ55㌢×幅70㌢×奥行40㌢

準大賞（立体）
＜蜃気楼＞
高田 吉朗（岐阜県）

審査風景。応募作品のレベルは高い

風まくらざきジュニア展大賞作品

風まくらざきジュニア展の審査会が７月14日、南冥館で行われ、応募総数1,366点の中から入賞26点、入選243点が選ばれました。入賞・入選作品はお魚センターに展示されています。

小学生低学年の部
竹田奈々美（立神小１年）

小学生高学年の部
上園裕太郎（枕崎小６年）

中学生の部
古市明里（武中〈鹿児島市〉２年）